

非能率の能率

新井, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学研究室

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

1950-07-01

成果を得られない状態になった。そこで地理学者にも協力せよとせられている。地理学者は従来、地形、土壌、水、気候というような自然要素と作物との因果関係を直接調べて農業地理としていた方面もあるが、これには途中で飛躍があつたように考へられる。これからは自然から農地なり山林地への発展過程を調べることに、次いで農地、山林地と作物との関係を調べる事が農業地理の一方向として進められるべきではなからうか。幸にして渡辺操氏、竹内常行氏等の此方向の研究がある。私共も此方面への研究を怠して多少とも貢献したいと考へている。

非能率の能率

副会長 新井 浩

旅行が樂に出来る頃に旅行をしなかつたので、この頃あらゆる機会を把えて出かける様にしている。大分好転して来たとは云え、運賃・宿泊料ともに未だ手頃とはどうしても思われない。だから相当に心の幸福をしていても先立つものが愈の如くならないのは致し方ない。併し行樂に行ける人々を羨しく思いつながら、研究旅行の出来ないことを歎いたり、一足跳びにそれを社会の矛盾などといいつけるのは余り得手勝手なことである。行樂に行く人々も契は「苦あつて樂あり」というのが大抵の場合であるから、それ程羨望すべき御身方とは限らない。寧ろ人混みの少い処へ行き、安い宿に泊つて然も取る程度の知的慾望を満足させて貰れる私共の方が幸福かも知れない。

宿泊もしなければならぬ様な遠隔地ばかりがよい処とは限らない。大抵な処にすんでいても、日飯りの出来る範囲内に行き渡り場所はいくつもある。交通機関の発達した今日では鉄道で一〇〇軒行つても目的地で費す時間がゆつくりとれる。だから日飯りの圏内で行先に関する事は先ずないだろう。私の旅行の八〇%以上は日飯りである。朝早いのは苦手だから一人旅のときは日没までを目的地で過して暗い道を戻つて来るのが定跡になっている。尤もこれは悪習慣だから、早起して往復ともに途中の観察が出来る様な時間の使い方をしたい。日飯りの行先のよい所は根柢さえあれば割合簡単に何回でも出かけて行ける処にある。観察の補足が容易であるし季節を変えての観察が出来るのは何よりである。俳句が発達する日本では季節による変化を感得して土地を遊歩する事は出

承ない。

居ながらにして千里の外を知る様な書物を読む事は勿論大切である。外国地誌の場合は殆んどそれが唯一の手段であらう。日本地誌についても大半の地域に関しては同じ事である。一人の人間がどんなに心がけが良く、又旅費に恵まれているとしても旅行し観察する事の出来る範囲は知れたものである。況や資料と觀察等をまどめて地域を理解する事の出来る範囲は一層着しく限定されたものに違いない。だから能率的な勉強法は旅行の時間と労力や旅費を凡て読書に集中する事にあるのかも知れない。そして旅行など最も非能率な勉強法であらう。しかも私がこの非能率な旅行をし且非能率な旅行を奨めるのは、地域を理解する過程を理解する爲であり、従つて記載された地誌を飛躍的に深く理解する事が出来る高い能率の故である。又もし敢えて付加すれば地誌の爲に微力を盡す喜びの爲である。

千 山 萬 里

顧 門 浅 井 辰 部

「一夜、三代の御招待で奥様御子様と共に福州料理の卓子を囲む。話は富院の昔話に絞つたが暫らく口に不存をしていた僕等の事にて耳より口の方が忙しい。吾助運と思つて用意して下さつた沢山のビールも調立材料の整理というは争のある身には残念ながら逐畝せざるを得なかつた。-----」 中学を卒業した頃の私に未だ見ぬ支那大陸の夢と同 性の遊がせをしみじみ哉か

「チ、ハルに着いたのは夕方だつた。S氏に迎えられ公所に模付けになる。----雑談してゐる中に旅行費に問題が起つてS氏は仲々僕等をいざめる。君等は何処へ行つても他人の厄介にばかりなつて書院の恥だぞ。先輩や知合の家に泊るのはまあいいが、る人もち人もつめかけるのは考へものだぞ。甚だ耳が痛い。』大体学校が充分の旅費を出さないのが悪い。----学校に一筆書くから君等の予算表を一枚置いて行つてくれ。』とのことでその晩は同行する人の予算表を視察して提出する。こんなに言われながらも、そこは先輩だ、腹も立たない。』

視察記「千山万里」は日華の風雲が漸く急にならうとした昭和6年、東亞英文書院の学生70余名が19班に分れて或は黒龍江を通り、或は